

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第二5:1~10「神の下さる建物」

[1]「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です」

幕屋とは今日でいうテントのことであり、古び、衰え、やがて死に至る私たちの肉体の比喩である。それに比して、神の下さる建物、天にある永遠の家とは、神が与えてくださる復活のからだのことである。ここに私たちの希望がある。

[2-4]「私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからではなく、かえって、天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです」

私たちはこの地上では様々な労苦や悲しみを味わう。また信仰のゆえの苦しみ、試練も経験する。しかし、それゆえに早くこの地上を去りたいというのではなく、天からの住まい、復活のからだを着たい、もはや古び衰えることなく、死ぬこともなく、罪のしみもなく、キリストの義をまとい栄光ある姿に変えられたいとの思いからこのように願う。また、それはすべてのクリスチャンの信仰告白でもある。

その時こそ、死ぬべきものがいのちにのまれてしまう時なのである。→ I コリント 15 : 50~57

[5]「私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました」

イエス・キリストを救い主と信じる者には御霊が与えられる。→ I コリント 6 : 19
この御霊が私たちの地上の人生において正しく導き、守ってくださり、また私たちの復活の保証となっていてくださる。

[6-8]「そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています」

主なる神は天におられ、肉体を持つ私たちはこの地上にいる。そういう意味において私たちは主から離れている。しかし、それゆえに、目の前に起こってくる出来事に左右されるのではなく信仰によって歩まなければならない。→ヘブル11:1、8
確かに、この地上よりも主のみもとにいるほうがよいが、この地上に生かされている間は、私たちは与えられている人生を信仰を持って歩み続けることが必要。

[9-10]「そういうわけで、肉体の中であろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです」

私たち信仰者の願うところは地上にあっても、肉体を離れて天にあっても、主に

喜ばれることでなければならない。10節の「キリストのさばきの座」とは信仰者各自が地上で生きてきた時になした数々の行いに対するさばきで、その行いに対する報いがあたえられる時のこと。→マタイ25：14~30、ローマ14：12

救い主イエス・キリストに対する信仰を持たなかった者に対するさばきについては→ヨハネの黙示録20：11~15参照

クリスチャンはキリストの十字架の贖いのゆえに滅びに入れられることはない。ただ、地上での行いに応じて、それぞれの報いに差が出てくる。それゆえ、私たちは、この地上で行かされている間、むなしいことに時を費やすのではなく、天から与えられる住まいを望みつつ、主に喜んでいただけるように生きていくことが大切である。